

中国人留学生の教育制度的背景について

短期大学部地域総合科学科

准教授 梶原 博

① はじめに

中国人留学生の教育に関わっていると、驚くこと、腹の立つことも多い(もちろん、偏見である。本来、外国人と接するということはそういうことである)。

いわく、中国人は先生の指示に従わない、カンニングを平気でする、他の学生を指名して質問しているのに、答を横取りする等など。

最初のうちは、国民性の違いとか文化的な違いなどと言って、自分の中で理由づけをしていたのだが、最近、ちょっと違うぞと思うようになった。

「これはまずいぞ」「これまで自分は勘違いをしていたのではないか」と最初に思ったのは、2年前である。

この年私は、入学した留学生の半数に対して、学科自前の初年度教育を行った。通常は、初年度教育のうち日本語学習を中心とする授業の80%を、文学部日本語過程(現「日本語教育研究センター」)にゆだねていたのだが、この年は入学者数が多すぎて、日本語過程から学生があふれてしまったのだ。

これまで、初年度教育の柱とすべきほとんどの企画(日本事情オリエンテーションと日本をテーマとする作文指導、学外研修(遠足)、スピーチコンテストなど)を日本語過程にゆだねていたのだが、これを自前でできるように(あるいはせざるをえなく)なったのである。

幸い、授業の中心である日本語教育の担当者が情熱あふれる人々で、日々の授業を様々な学外活

動と結びつけながら取り組んだ。

そうした取り組みの一つとして、秋の学園祭への出店を学生に勧めた。「金儲けができるぞと言えば、もろ手を挙げてこの企画に乗るに違いない。指導についても、手続き的なことだけ押さえておけば、利益をめざして、自分たちでどんどん準備を進めてくれるだろう」と考えた。餃子パーティなどをさせると、手際良く料理をする姿を知っていたことも楽観につながっていた。

ところが、学生は全然乗ってこない。アルバイトで忙しいせいとか、いろいろ考えていたのだが、学生と直接話して分かったのが、「模擬店」が何だか分かっていないということだった。それどころか、「学園祭」自体を知らない学生が多かったのである。

我々が中国人留学生に対して感じている困難は、文化的背景とかいう怪しげなものではなく、もっとくっきりとした分かりやすい何かが原因ではないかと思ったきっかけである。

また、自前の初年度教育に私自身加わって強く感じたことがある。それは、指名して質問しても、それを無視して、別の学生が答える、ということだ。

それまで、経済、経営の授業でも同じようなことを経験していたのだが、これはもともと、学生と議論をしようという気持ちで質問していたので、あまり気にしていなかった。しかし、初年度教育における日本語の授業でこれをされると、日本語の苦手な学生はいつまでたっても上達しない。何か変だと思って、他の教員に尋ねると、多くの教員が似たような経験をしていた。

知識として、現在の中国がかつての日本以上の

受験競争の中で教育が行われていることは知っていたつもりだった。しかし、そうはいても、時代や地域を超えた「学生生活」に関する幻想を我々は持っており、程度の差はあれ、中国でも似たような「学生生活」があるのではないかと考えていた。

例えば、戦前の旧制高校を、バンカラだの文武両道だといった何かとともに振り返る。あるいは、私と同年輩の人ならば、『アルトハイデルベルク』の学生生活を思い起こす。人によって映画『チップス先生さようなら』を思い起こす人もいるかもしれない。中には『車輪の下』を想像する人もいるかもしれないが、いずれにせよ、学生生活は多面的な人間形成の場であるという漠然とした思いは、皆等しくもっているはずだ。

こうした学校生活に対する共通の感覚は、ひとえに、想像を絶するほど綿密に練り上げられた学校教員の努力のたまものであることを、教員の女性と結婚して、最近はつくづく感じるのである。

毎年、スタジオジブリの「おもひでぽろぽろ」を留学生に見せている。この映画では、私がまさに育った昭和30年代中ごろの小学校5年生の主人公の生活が、フラッシュバックのように挿入されている。

廊下を走ったらいけないという規則を守るために、走り始めた場所までいったん戻って歩き直す「やり直し」、学級会が紛糾した時に「意見のある人は手を上げて」と叫ぶ委員長、夏休み中でも学校の威光が及ぶラジオ体操、給食のときに残せるおかずは一種類だけ。映画を見ていると、主人公と年代だったが故のノスタルジーに浸るとともに、映画に映し出される東京の学校生活と、鹿児島島の田舎にいた私の学校生活が、ほとんどと言っていいくらい同じであることに圧倒されてしまう。ああ、こうして私は日本人になったのだな、と。(もちろん、映画には家庭生活も描かれている。奮発してパイナップルを買って帰ったのはいいけれど、奥さんから「食べ方を聞いて来なかったんですか」と聞かれて、無表情に何も答えず煙草をぶかぶか吹かすお父さんとか)

そういうことで、細かい学校生活の事実を知ることなしに「中国人は」と決めつけることは、サー

ビス産業に属するものとして反省の要あり、ということアンケートを取ってみることにした。

初めにお断りしておくが、アンケートの質問の仕方、回答選択肢はかなり私個人の「癖」がある。例えば、「〇〇の時に、どうするか」という質問に対しては、本来、行動結果とその理由を別々に回答させるべきであろうが、アンケートをコンパクトにするため、両者を含んだ回答選択肢の文言になっていることが多い。また、微妙な質問内容に対して、そもそも回答者が全員十分な理解をしているかどうか、若干怪しい。さらに、質問自体を学生がどこまで日本語として理解しているかという問題がある。本来回答すべきできない質問に答えているケースも多々ある。未回答者の処理等、精確なアンケート処理としては問題があるが、それも含めての傾向判断であると理解していただきたい。

アンケートは、短大入学後2期目のクラスと3期目のクラスに対して、ほぼ同時に、学期末に行った。質問は、かなり微妙なニュアンスの理解を要求しているため、一読して回答させるのではなく、一つ一つ質問の意図などを説明しながら行った。2期目のクラスについては、時間の関係で、説明の時間が十分取れなかったため、この後の回答の分析は3期目のクラスに対する分析である。しかし、クラスによっての傾向差はあまりなかった。傾向の差があると思われる質問については、その旨、書き加えている。

アンケートは2種類とったが、今回は、「勉強方法にかんするアンケート」の分析を行っている。

なおアンケートのサンプル数が少ないため、ここでの分析は、あくまで一つの見方にすぎない。今後、アンケートの質・量を改善して、本格的な授業改善につなげていきたいと考えている



2 中国人学生は他の人に質問を当てられても、答えてしまう？

アンケートの冒頭は、今回のアンケートのきっかけとなった疑問、「当ててもいないのに、どうしてこんなに答を横取りするか」について、印象の確認を行った。

質問した学生だけに答えさせるということは、授業運用における重要なテクニックである。教員が誰かを指して質問するのは、単にその学生の理解を試すことではない。あくまで、授業運用の一環であり、その学生に答えさせ、それをみんなが聞いて考えさせることが目的であることが多い。こうした方法論の背景には、「学習（あるいは教育）とは（必ずしも）個人的行為ではない」ということが前提されていると私は考え、アンケートをとってみた。

質問1 中国で授業を受けているときに、先生が「〇〇の答えはなんですか」と質問したら、どうしていましたか。

- ・手を上げて、自分がわかっていることを、先生に伝える …16人 (67%)
- ・まわりの学生に負けないように、すぐに大きな声で答えを言う …1人 (4%)
- ・まず、周りを見て、自分が最初に答を言うかどうか考える …7人 (29%)

意外である。最近、北京にいた経験もある中国教育制度史が専門の先生と話した時も、「中国の学生は、分かっているなくても、はいはいと手を上げる」と聞いていたので、2番目の回答が、多くはないものの、ある程度出るだろうと予想していたのだが。

選択肢の3つ目は、「これは日本的な風景だね」という「誘導」にも関わらず、それなりの数になっているが、現在の自分たちと混同されている可能性もある。2期目の学生の場合は、「手を上げる」学生の割合はほぼ同じだったが、「周りを見る」慎重派は半分であった。

質問2 日本での授業を受けているときに、先生があなた以外の人を指して、「〇〇さん、この問題の答えは何ですか」と質問しました。どうしますか。

- ・自分が答を知っているときには、そのことを先生に教えてあげたいので、答を言う。 …4人 (17%)
- ・自分は答を知っているときでも、先生は他の人に質問しているので、黙っている。 …12人 (50%)
- ・自分は答を知っているとき、本当は、答を言いたいが、日本の先生の考え方を尊重（そんちょう）して、我慢する。 …8人 (33%)

ここでは、「やはり」という結果になった。さすがに、1年半日本で授業を受けてきただけあって、先生の顔を立てて黙っている学生が少なくない。この学生を加えると、自分の意思で思いとどまる学生を越えてしまう。今回のアンケートのきっかけとなった、「中国の学生は自分が指されていなくても答を言ってしまう」という印象が、このメンバーだと裏書きされた。（2期目の学生も全く同じ傾向である）

ただし、実際に口を出すという学生の実数は決して多くない。おそらく、少数の学生に対する私たちの印象が強いのであろう。先入観にとらわれている可能性が大きい。

次は、核心的な質問である。

質問3 A 日本での授業のときに、先生があなた以外の人を指して、「〇〇さん、この問題の答えは何ですか」と質問しました。しかし、その人は、すぐに答えられず、いろいろと考えています。この時、あなたはどのように考えますか。

- ・この人は答が分からないのだから、すぐに別の人を指して欲しい。 …4人 (17%)
- ・この人は今考えているので、もう少し待ってみよう。 …15人 (63%)
- ・この人に答を教えてあげよう。 …5人 (21%)

「3分の2の学生が待つ」と解釈するか、「3分の2の学生しか待たない」と解釈するか。微妙である。ちなみに、参考程度に、参加者16人の日本人学生の授業でアンケートをとったら、当てられてもいないのに答えるという学生はほとんどいなかった。

待たない学生、待ちたくない学生が3分の1いるが、「答えを教えてあげよう」つまり「指されていないのに答えてしまう学生」の理由を聞いてみる。

質問3B 上の質問で、「この人に答を教えてあげよう」と答えた人に質問します。どうして、答を教えるのですか

- ・かわいそうだから …0人 (0%)
- ・早く答えないと、授業が進まないから …5人 (100%)
- ・自分が答を言うことが、嬉しいから …0人 (0%)

質問3Aをはじめとして、回答は択一なので、「すぐに別の人を指して欲しい」と思う学生と「答えを教えてあげよう」と思う学生は、別の学生である。しかし質問3Bを見ると、結局どちらも、時間がもったいないと思っていることが分かる。ちなみに、集計からは削除したが、「少し待つ」と答えた学生のうち、2名が質問3Bで、「授業が進まない」という欄に○印をつけていた。

こうしてみると、日本的な（あるいは一般的な）、「教室の中の質問のやり取りを通して、クラス全体の理解を深める」という方法論は、中国人留学生に対してはなかなか大変であるということが分かる。

こうした考え方の背景には、前述したように、学習が個人的行為として考えられているからであろう。

授業を、知識を教授する場ではなく、様々な技術や話題を駆使してインタラクティブに運用していく場だと日本の教師が考えているとするならば、授業とはコミュニケーションの場であり、「授業を通じて（知識以外のことも含めた、ヒトとしての）何ごとかを伝える場」である。だから、われわれは勢い、授業の中で様々なことを語ろうとする。しかし、それは彼らには、時間の浪費として映る。

「自己責任を重視する中国人」というイメージを確かめるために質問4をしてみたのだが、さすがに、この質問では無理があった。以下の数字から、自己責任＝自分中心という結論は出てきそうもない。日本人学生との結果比較も、それほど大

きな違いはない。

質問4 少し知っているが自分とは特に仲の良くない中国人の学生が、アルバイトのことで警察につかまって、中国に帰らなくならなければならなくなりました。

質問A どのように思いますか。 複数回答可

- ・自分はそうならないように気をつけよう …10人 (42%)
- ・その人は運が悪かった …7人 (49%)
- ・かわいそうだ …11人 (46%)
- ・してはいけないアルバイトをする方がよくない。もっと勉強をするべきだった。 …9人 (38%)
- ・特に何も感じない …2人 (8%)

質問B 日本語の授業のときに、先生がこの話をして、「アルバイトをするときは、ちゃんと規則を守ろう、アルバイトばかりしないようにしよう」と注意をしました。どう感じますか。

- ・そうだ。気をつけよう。 …16人 (67%)
- ・自分とは関係のない話だな。 …2人 (8%)
- ・授業の時間が減るので、別の時に話して欲しい。 …7人 (29%)

ただ、中国人が自己責任主義だと教員に思わせるのは、はっきりと面と向かって「そのような注意は時間の無駄だ」と言ってくる学生が存在するからでもある。いずれにせよ、この問題については、「保留」である。

③ 中国人学生は、体系的に勉強しようとしらない？

質問5からの背景を説明する。

日本語能力試験とは、日本語能力の世界的な判定基準となっている資格である。かつては1級から4級まであったが、現在は、N1からN5と、名称変更されている。N1で、日常生活がつつがなく送れるレベルであるとされ、文部科学省は、留学の最低基準だと言っている。文法的にはN2で日常必要なことはほぼすべて網羅され、読みやすい教科書なら、N2の文法と辞書で十分こなせる。私自身は、「十分なN2」とやる気・目的意識があれば、N1がなくても、大学での学習は可能だと考えている。

質問の背景だが、短大に入学する留学生の日本語プログラムとして、前述したような理由もあってN2レベルの授業は不可欠である。この授業は本来1年次に終えるべきなのだが、実際には2年次に持ち越す学生も少なくない。ところが、せっかく2年次用にと用意した授業を受講する学生が想像以上に少なく、愕然となった。個別の聞き取りによって、少しずつ状況が見えてきたのだが、今回のアンケートで、数値化して確認してみたかったというわけである。

質問5 自分が今、短大1年目を終え、卒業まであと1年だとします。そして、日本語能力試験の3級程度の日本語力だとします。授業で、日能試N1対策講座とN2対策講座が開講されます。あなたは、どの対策講座を選びますか。

- ・ N1対策授業にもN2対策授業にも参加しない …2人(8%)
- ・ N2対策授業には参加しないが、N1対策授業には参加する …6人(25%)
- ・ N2対策授業には参加するが、N1対策授業には参加しない …7人(29%)
- ・ N2対策授業にもN1対策授業にも参加する。 …2人(8%)

中国人留学生との付き合いが少ない人は、理解しがたい結果かもしれない。日能試の内容を知らなくても、常識的に、3級が日常的レベル、2級で実務での実用レベル、1級で十分かそれ以上のレベルであると見当がつくわけだが、アンケートの結果は、「ようやく、実用レベルの勉強をしなければならないはずの学生が、そこを飛ばしてしまう」ことが多いことを意味している。「N2が基礎で、ここができなかったら、絶対にN1レベルを理解できない」と、2年間にわたって説得してきたが、ほとんど効果はなかった。当初は、日本語能力の低い学生に特有の問題だと考えていたのだが、今回のアンケートを見ると、回答者の日本語能力に関係ないことがわかった(アンケートは記名式である)。

さらに、選択肢4を「どちらも受講する」を選んだ「まじめ」な学生に対して、「時間割で、二つの授業がぶつかったらどちらを選ぶか」と尋ねたら、半数以上がN1級対策授業を選択しており、「基礎から積み重ねていく」という日本の感

覚が必ずしも通用しないことが改めて確認される。

このような驚くべき結果になるのは、留学という特殊な環境が与える影響も無視できない。質問用紙には、次のような前提条件が明記されており、口頭でも確認している。

- ・ 自分は今、日本語能力試験の3級(N3)程度の日本語力であり、2級(N2)に合格することは難しい。
- ・ 自分は、今から短大の2年生になる。卒業まで残りはあと1年。
- ・ N3からN2に合格するためには、半年くらいの勉強が必要である(合格率50%くらい)
- ・ N2からN1に合格するためには、1年くらいの勉強が必要である。
- ・ したがって、相当がんばらなければ、1年間でN1に合格することは難しい。
- ・ 1年後の編入試験では、N1に合格していなくても、別府大学やその他の学校に進学できるチャンスは大きい。

上記のような条件は、確かに、彼らが功利的に走ることを助長する。また、「わざわざ日本まで留学して、N1も取れないんだったら、何も取らない方が(自分の意思や、アクシデントのためだと思われるから)、周りに対してプライドが傷つかない」という「見栄」も大きい。

それにしても、普通の日本人だったら、「今、3級だから、次は2級をやるのが当たり前」であり、「たとえ、卒業までに1級に手が届かなくても、自分の基礎力として役に立つ」と考えるだろう。

中国人であっても、本来はこのような考え方をするかもしれないが、上記のような日本語力の前提条件のもとでは、評価されない2級の対策授業を受けることはそもそも「無駄」である。それに対して、1級対策の勉強は、小なりといえども合格の可能性があり、そして、資格取得という点で、2級とは比べ物にならない重さをもつのである。

こういうわけで、N1合格に向けてN2から積み上げていくというかつての計画は見事に挫折したのであった。

④ 中国では受験積み込み教育一色？

留学という特殊な状況はあるにせよ、中国人にとって勉強というものが長期的に積み上げていくものだという感覚が薄いのではないか、というのが、ここまでの印象であった。これを、現世的とか短期利益的とかいった「中国の国民性、文化」ととらえると救いがないが、制度的な背景がはっきりすると、それなりに対応することも可能になる。事実、厳しい大学統一テストと、それに向けての暗記中心の高校の学習については、最近日本でも知られるようになったことであるが、これは日本も通ってきた道であり、何もことさら中国的だと言う必要もない。我が国のこれまでの経験がそのまま役に立つはずである。

学習態度というものが、学校生活全体から醸成されるものである以上、素人考えで自分自身の学校生活で重要だと思える要素をピックアップして、彼らに聞いてみたのが、「日本と中学の学校生活の違いに関するアンケート」である。結果を表で示す。

私自身にとっては、ある程度予想された結果が確認されたが、あらためて、われわれが当たり前だと思っていたことが、中国ではそうでなかったということである。

一言でいえば、いろいろな企画を通して、学生の自主性を育てて行こうという制度は、国として模索中であるということだ。班活動、クラス委員、児童会・生徒会など、それぞれ半数ほどが経験していない。クラスとして育てていく、という思考法が学生に希薄なのは当然である。

とはいえ、こういう状況は、確実に変化しつつある。同僚のやや年配の中国人教員のすべてが、上記の結果に驚いていた。彼らの時代には、「なかった」ものばかりだったのだ。また、インターネットには、「中国の詰め込み教育」というレッテルを覆そうという政府のキャンペーンも多くみられる。

また、本学科でも取り入れている、地域実習などの体験系授業については、一部学生からの「無

駄」という声もなくはないが、「もっと増やして欲しい」という意見が半数以上だ。

「日本式」(かどうかわからないが)の授業方法は、やり方次第では、受け入れられる余地は十分あると言えよう。

⑤ いくつかの対応策

さしあたり、ここまでの制度理解から、今後の方法論に向けて考えてみたい。

第一に、「日本式」あるいは「非中国式」方法論に対する、徹底的な説明の必要性だ。前提として、互いの教育システムの相違に関する十分な理解も含まれる。

20年間の蓄積の影響はきわめて大きい、留学生達の大人としての理解力は、日本人とそれほど変わることはない。きちんとした説明がすべての出発点である。

第二に、利をもって説くことの大切さである。

利を説かずには何かをしてもらえるのは、同じ文化的共同体の中だけである。教員という立場はしばしばこれを忘れさせてしまうが、異なる共同体に所属していた人間に対して、利を説かないで何かをしてもらえるほど、われわれ教員は人格者ではない。

専門学校での留学生教育の経験の深い非常勤スタッフが「この日本語をよく理解できないことは、あなたたちの日々の生活の不利益に直結するのだ」と言って教育していたそうだが、他人を納得させる利こそが理であると、最近はつくづく感じる。

日本式の共同主義が有効、または大切である状況は少なくないと私個人は信じているが、留学生に納得してもらうためには、あらゆる手練手管を通じて、その効果を実感してもらうしかない。そうした手練手管を組み込んだ教育研究体制が必要である。

第三にルールの位置付けと、その説明の仕方がある。

大学では、半期15回の授業のうち、三分の二以上の出席をしないと期末試験を受験できない。では、学生が限界を超えた6回欠席したらどうなる

「日本と中学の学校生活の違いに関するアンケート」の結果

解答数24

| | | あった | なかった | 覚えていない | 未記入 |
|--------|-----|-----|------|--------|-----|
| 班活動 | 小学校 | 33% | 54% | 13% | 0% |
| | 中学校 | 33% | 58% | 8% | 0% |
| 班活動 | 小学校 | 33% | 54% | 13% | 0% |
| | 中学校 | 33% | 58% | 8% | 0% |
| クラス委員長 | 小学校 | 63% | 33% | 4% | 0% |
| | 中学校 | 54% | 46% | 0% | 0% |
| | 高校 | 50% | 46% | 4% | 0% |

| クラス委員の選出方法 (学校の違いは区別せず) | 選挙 | 立候補 | 先生 | 未記入 |
|----------------------------|-----|-----|-----|-----|
| | 60% | 0% | 40% | 0% |
| | 92% | 0% | 8% | 0% |
| | 42% | 8% | 33% | 17% |

| 各種委員会 | | あった | なかった | 覚えていない | 未記入 |
|-------|-----|-----|------|--------|-----|
| 各種委員会 | 小学校 | 58% | 33% | 0% | 8% |
| | 中学校 | 50% | 33% | 0% | 17% |
| | 高校 | 46% | 46% | 0% | 8% |

| 学生自治組織 | | あった | なかった | 覚えていない | 未記入 |
|--------|-----|-----|------|--------|-----|
| 学生自治組織 | 小学校 | 21% | 50% | 17% | 13% |
| | 中学校 | 29% | 50% | 13% | 8% |
| | 高校 | 38% | 50% | 8% | 4% |

| 学園祭 地域のお祭り | | あった | なかった | — | 未記入 |
|---------------|--|-----|------|---|-----|
| 学園祭 地域のお祭り | | 38% | 50% | — | 13% |
| | | 46% | 17% | — | 38% |
| | | | | | |

| 学園祭の企画種類 | クラス単位 | クラブ単位 | 模擬店 | その他 |
|----------|-------|-------|-----|-----|
| 学園祭の企画種類 | 42% | 92% | 8% | 42% |

| PTA | | あった | なかった | 覚えていない | 未記入 |
|-----|-----|-----|------|--------|-----|
| PTA | 小学校 | 75% | 25% | 0% | 0% |
| | 中学校 | 71% | 25% | 0% | 4% |
| | 高校 | 17% | 58% | 13% | 13% |

| ディベートのある授業 | よくあった | 少しあった | なかった | 未記入 |
|------------|-------|-------|------|-----|
| ディベートのある授業 | 29% | 50% | 17% | 4% |

だろう。おそらく、この段階で自動的に受験資格の喪失、ということには必ずしもならない。まず呼び出して説諭し、「残り全部の授業を休まず、遅刻せず来てみる。そうしたら、道は開ける」と言うことが多いのではないか。

しかし、こうした教育的指導は中国人留学生に

はほとんど効果がない。彼らは、まず6回欠席した段階で、きっぱりとあきらめる。呼び出しをかけて、「残り全部来たら、云々」と諭すと、「では、そうしたら、試験を受けてもいいですか」と聞き返す。もちろん、イエスと答えるわけにはいかないので、「そのときに考えることだ。まず、まじ

めにやってみろ、それが大切だ」というと、あからさまに不審の目でこちらを見返す。

よく考えたら当たり前である。抜け道がある指針をルールとは呼ばない。もちろん、世の中はそう単純ではないが、彼らが不審がる姿勢は健全である。仮にルールが適用されないケースがあるならば、なぜ、そのようなことが生じるのか、より上位のルールについて説明しなければならない。そして、説明できないようなルールの存在については、そんなルールはやめろとまでは言わないが、慎重になるべきだろう。

とりわけ、中国人留学生の場合、本来教師というものは「高い」存在であり、その高さを支えているのが厳しさのようである（このあたりの議論については、『中国教育の文化的基盤』顧明遠著（大塚豊監訳、東信堂、2009年）が面白い）。学生に「理解のある」教員は、往々にして軽蔑される。ルールに則ったきびしさは、彼らはある程度進んで受け入れる。

「日本での勉強方法にかんするアンケート」の最後の質問は、

質問7 S先生は、授業の前や後に、教室の掃除をしたり、自分の目標を教室の壁に貼ったり、いろいろと特別なことをしています。このことについて質問します。

- ・S先生のクラスにいたことがあるので、経験している。
- ・S先生のクラスにいたことがないが、知っている。
- ・知らなかった。
- ・質問B S先生のいろいろな特別なことは、成績がよくなることと関係があると思いますか。
(思う・思わない・分からない)

というものであった。S先生とはスパルタでならず本学の国語教員である。いろいろな意味で「厳格」な教師であり、反発も根強いと期待していたのだが、何と三分の二の学生が「効果がある」と答えた。残りは、「分からない」「ない」「未記入」が等分である。この傾向は、各種試験の平均レベルの高い1年生に対するクラスのアンケートでも、まったく同じだった。この結果の分析は、もう少し丁寧に行うべきではあるが、ルールの在り

方や教師の厳格さについて、我々がいろいろと考えるべきであることは明らかである。

⑥ おわりに

以上、アンケートと経験に基づきながら、中国人留学生の教育的バックグラウンドとそこから導き出される方向性について考えてみた。

繰り返しになるが、ここでわかることは、われわれが日々感じている困難は、中国四千年の歴史だとかいった、動かしがたい何かに基づいているのではなく、たかだか20年の制度によって生じているのだ、ということだ。具体的な原因がはっきりしたら、具体的な対応策は必ず見つかる。

一方、大学という場に所属している人間として、留学生に関わる諸問題に直面したときに忘れてはならないことがある。それは、留学生問題（と名付けられる何か）は、日本人学生問題でもあるということだ。この点の理解が、学内にほとんどないのは極めて残念なことだ。また、留学生教育の現場に携わっているもの同士の間で、留学生問題をシステマティックに議論することが少ないのも事実である。

留学生問題の解決は、経営面とは別に、大学が最優先すべき問題の一つである。

大学がサービスの対象とする20才前後の「若者」は、大学スタッフの多くにとっては世代の違う異文化集団である。留学生への対応力は、大学の対応力が表れてくる。留学生に対応できないということは、おそらく日本人学生にも対応できないことを意味しているのだ。

今回のアンケートをきっかけに、学内のいろいろな先生方とこの問題について議論したのは、嬉しい限りであった。今後、本当の意味での国際化に向かって、さらに議論と具体的な対応策を積み重ねていきたいと考えている。